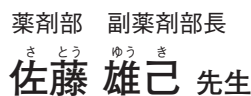
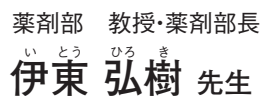


地域完結型医療への転換を目指した医療機能の分化と連携、地域包括ケアシステムの構築が進む中で、地域全体の薬物療法の安全性、有効性の向上における薬剤師の役割は重要性を増している。こうした現状を踏まえて、大分大学医学部附属病院（大分県由布市・618床）薬剤部では、薬局薬剤師を対象としたフィジカルアセスメント講習会の開催や院外処方箋への検査値の記載のほか、薬剤師不足にある地域病院への人的支援や相談窓口の開設など、地域に目を向けた様々な活動を展開している。大学病院薬剤部による地域医療への貢献のあり方について取材した。



大分大学医学部附属病院は県内唯一の大学病院として、先進的な医療の提供、地域医療に貢献する医療人の育成とともに、地域医療の中核的役割を担う。その中で、薬剤部も安全・安心な薬物治療の提供を目指して、病棟業務をはじめ手術室や外来化学療法室での処方入力支援、もの忘れ外来での薬剤管理指導など次々と業務を拡大、近年では地域完結型医療において大学病院薬剤部が果たすべき役割を見据えた活動を展開している。

の状態把握に基づく副作用の防止や重篤化の予防、医薬品の適正使用を目的に、「フィジカルアセスメント講習会」の開催、院外処方箋への検査値表示などを進めてきた。

「フィジカルアセスメント講習会」は、大分県薬剤師会と大分大学医学部附属地域医療学センターの協力を得て2014年3月より開始した。全10テーマを約半年間かけて学ぶ講習会を年2回開催し、2016年度までに168名の薬局薬剤師が受講した。

実技では呼吸音聴診シミュレータ、聴診器、心電図などを使用した副作用モニタリングを体得する。特筆すべきは、同院各診療科の若手医師10名が指導することであり、この協力体制が実現した背景には、病院薬剤師が築いてきた医師との信頼関係がある。

企画・運営の実務責任者である副薬剤部長の佐藤先生は、「フィジカルアセスメントは在宅医療だけでなく、来局された患者さんの評価にも役立ちます。例えば、薬によるパーキンソン症候群等の副作用の特徴や現れ方を学ぶことで、歩き方や動作から副作用を疑い、適切な対応ができます」と話す。実技に重点を置いた参加型の講習会は、受講者の満足度が高く、受講者間および若手医師とのコミュニケーションを促進し、地域医療を支える仲間としての連帯感の醸成にもつながる。今後、一人でも多くの薬局薬剤師の参加を目指し、さらに魅力あるプログラムを企画していく考えだ。

院外処方箋への検査値表示は、電子カルテの更新を機に2016年1月より開始した。運用開始前には県内の薬局薬剤師を対象に、検査値の活用方法を含む説明会を3回実施、合計約400名が参加した。「がん治療をはじめ多くの疾患の治療が外来にシフトする中、薬局薬剤師が検査値や身体情報を活用することで、処方の適正化や副作用の早期発見などにつなげてほしい」と伊東先生は期待する。

表示する検査項目は、白血球数や好中球、ヘモグロビン値など14項目で、過去90日以内の直近2回分の検査結果が確認できる。また、身長、体重、体表面積、化学療法レジメン名のほか、処方医と保険薬局間の連絡事項記載欄も設けた。なおレジメンは薬剤部ホームページで公開している。さらに、全国に先駆けて処方内容や検査値をQRコードで提供、薬局ではバーコードリーダーで読み込めば、簡単かつ正確にデータを入力・蓄積できる(資料2)。

薬局薬剤師が医師に疑義照会した場合、その内容と結果は病院薬剤部にFAXでフィードバックされ、病院薬剤師はその情報を電子カルテに記載してデータベース化し、有用性の評価を行う。運用開始前後各5ヵ月間の疑義照会件数は、開始前の362件から開始後は420件に増加し、うち検査値に基づく用法・用量変更に関する疑義照会は20件であった。中には、疑義照会から定期的な

実施が必要とされる血清カリウム値の検査につながった例、腎機能に注意が必要な薬剤について医師に確認した例などがある。佐藤先生は、「運用開始後も研修会を行っており、検査値に基づく疑義照会が徐々に増えています。こうした事例を医師および保険薬局と共有することで、地域医療の質向上につなげたいと思います」と話す。

薬学部のない大分県では慢性的な薬剤師不足の状態にあり、特に中小病院では常勤薬剤師1人で奮闘する施設も少なくない。そこで、同院では2015年に竹田市の大久保病院(136床)、2017年からは大分市のへつぎ病院(188床)への薬剤師派遣を開始した。伊東先生が大久保病院に月2回、へつぎ病院に週1回、佐藤先生と主任2名が毎週土曜日に2病院に出向いている。

派遣先では、薬剤師への情報提供やアドバイスのほか、医師の回診への同行や使用薬剤の評価、がん化学療法に関する情報提供、院内全体の安全管理・感染制御に関するノウハウの提供、市民対象の講演会などの啓発活動を行う。「病院併設の介護老人保健施設での支援も行っていますが、ポリファーマシーなど高齢者が抱える問題を目の当たりにし、薬剤師が取り組むべき課題が見えてきました」という佐藤先生の言葉に、伊東先生は「地域病院への人的支援は大学病院の使命であり、医師は当然のよう

に行っています。薬剤師も地域医療の現場を知ることによって視野を広げ、研究や教育、臨床に還元する必要があります」と続ける。

地域病院での経験を通じて、身近に相談相手もなく困っている薬剤師への支援の必要性を痛感した伊東先生らは2017年5月より地域の病院薬剤師、薬局薬剤師を対象とした「がん薬物療法相談窓口」を開設した。化学療法レジメンや抗がん剤の調製、指導方法などの相談に、がん専門薬剤師の佐藤先生のほか2名のがん薬物療法認定薬剤師が対応する。相談はFAX、メール、TELで受け付け、原則として24時間以内に返答する。開始から3ヵ月で10件程の相談に対応したという。さらに、地域の薬剤師のレベルアップ支援として、2017年度には病院薬剤師を対象としたTDM研究会を立ち上げた。今後は感染対策における地域連携、総合的な薬剤師スキルアップ研修も視野に入れている。

佐藤先生は「進行中の取り組みをさらに前に進めるとともに、薬剤師の介入によるメリットを客観的に評価し、研究成果として発信したいと思います」と抱負を語る。8月より副病院長を兼務する伊東先生は、病院経営における役割も担うことになる。「院内外を問わず、現場で困っていることや問題点の解決策を共に考え、改善・連携をすすめていきます。そして、臨床業務と研究、教育の三本柱で、地域に貢献する大学病院薬剤部を目指します」と結んだ。

会期：2014年3月～2017年3月 計30回(1年間に10テーマを2回ずつ)
対象：大分県内の薬局薬剤師
方法：1日2テーマ(1テーマ：講義10分+実技50分)
講師：大分大学医学部附属病院各診療科医師10名
内容：フィジカルアセスメントの基本手技の習得
領域別のフィジカルアセスメントと副作用

	テーマ	講師
1	フィジカルアセスメント基本手技とその異常①	総合内科・総合診療科
2	フィジカルアセスメント基本手技とその異常②	総合内科・総合診療科
3	呼吸器領域のフィジカルアセスメントと副作用	呼吸器・感染症内科
4	循環器領域のフィジカルアセスメントと副作用	循環器内科
5	神経精神系領域のフィジカルアセスメントと副作用	神経内科
6	消化器領域のフィジカルアセスメントと副作用	消化器内科
7	腫瘍・血液領域のフィジカルアセスメントと副作用	腫瘍・血液内科
8	内分泌代謝領域の副作用	内分泌・糖尿病内科
9	膠原病・腎臓領域のフィジカルアセスメントと副作用	膠原病・腎臓内科
10	漢方薬の副作用	総合内科・総合診療科

[illegible]